北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

小学校教員養成の音楽授業

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2012-11-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 寺中, 哲二
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00003132

小学校教員養成の音楽授業

寺　中　哲　二

はじめに

音楽専攻生以外の学生に対する「小学音楽」及び「小学校音楽教材研究」（以後，前者を「小音」後者を「音楽教材」と呼ぶ）の二つの授業科目については，毎年開催されている，教大協第二部会の音楽専門部会でその講義内容が議題の一つとして出されている．

議題の中身として，履修期間・単位数・時間配当等もあるが，おもに大きな問題は，いかに学生に音楽的な力をつけたらよいかと云うことである．各参加者から多くの貴重な指導経験なり実践が披露され大変参考になっているが，この授業科目についての内容は必ずしもひとつに統一されるものでもなく，それぞれの大学の実状に合わせて行っているのが現状である．

「小音」については各大学共，鍵盤学習を中心に指導しているところが多く，その指導内容は，個人レッスン方式，集団指導制と云ったいろいろな方法で行っているが，本分校においては，５人の教官がそれぞれの特色を生かした，ピアノ中心の指導を行って来ている．私はML装置を使用して，集団学習を行っているが，これに関しては触れず，ここでは「音楽教材」に関しての指導内容を私の今日まで何度か修正をしながら進めて来た実践を披露するものである．

１．本分校学生の過去の音楽経験

本分校の学生が幼児期から小学校，中学校と，どのような音楽経験をして来たかを調査してみた．

私が本分校に着任したのは，昭和49年10月で，この時点から私が担当した「音楽教材」を受講した学生達が，小学校に在学していた時期は，おおかた昭和35年以降からの約10年間になる．

丁度，この当時私は，中学校・高校と教べんをとっていたが，小学校・中学校を通して音楽教科では，おもに歌唱指導が中心をなし，ぼつぼつ器楽教育に対する関心が高まり，教師の間で，器楽に対する種々の研究が少しずつ目立って来た時期でもあった．

たとえば，この当時まで器楽の中心楽器であったハーモニカに変り，新しく，リコーダーが出現し，ギターと共に各種のリズム楽器が次々と教育現場に入って来たのである．現在に至っては，鍵盤ハーモニカを始め，シンセサイザー等の電気，電子楽器の出現，同種属でアンサンブルの可能な多種類のリコーダー，ギターと，あらゆる楽器が導入される時代と変化して来ている．

このように当時，そろそろ器楽教育が目立って来た時期であると云っても，実際，本分校学生の調査をしてみると，たとえばリコーダーの経験者は５割にも満たないし，現在全国的に使用されている鍵盤ハーモニカは，当時小学校ではほとんど使用されていなかったので，その経験も全くない

ようである．また当時のリズム楽器類も大太鼓・小太鼓・シンバルの他に小型のリズム楽器（カスタネット・トライアングル・タンブリン等）があった程度で現在のように鍵盤を含めた多種類の打楽器群には到底及ばないのである．アコーディオン等のリード楽器も当時からあったが，その経験も皆無に等しく，今日のようにレベルの高い器楽教育の経験をしている子ども達とは違って，かなりの隔たりがあるように思われる．

勿論，学生達の中学校での経験についても同じことで，教科学習での器楽経験は皆無に等しい状態で，義務教育での器楽経験がこの程度であるから，高校においては，音楽を選択しなければ，音楽系の課外活動や，外部でのグループに属さない限り音楽経験をまったく持たない何年かが過ぎてしまったことになる．

しかし幼少の時期よりピアノ・オルガン等の個人レッスンを受け，大学に入る前まで続けて来た者もわずかだがいる．しかし彼等も，音楽に対する知識や演奏能力が多少あったとしても，学校での器楽学習の経験がない限り，他の楽器についての知識・技能はまったく無く，むしろ課外でのクラブ活動経験者の方が音楽的な力を多少備えているように思われる．それは，クラブ活動を通しての高度な音楽経験が集団での音楽に対する旺盛な好奇心，向上心と共に音楽の持つ，楽しさ，豊かさが自然に備わっているからであろう．

表(1)　函館分校学生の音楽経験表

年度／音楽経験	昭和49年	50年	51年	52年	53年	54年	55年	56年	57年	58年
高校で音楽を選択したもの	93人／266人 (34.9%)	115／258 (44.5%)	117／301 (38.8%)	112／253 (44.2%)	108／265 (40.7%)	75／145 (51.0%)	123／287 (42.9%)	98／295 (33.3%)	103／263 (39.2%)	132／276 (47.8%)
高校で音楽系クラブに入っていたもの	23人 (8.6%)	31 (12.0%)	66 (21.9%)	60 (23.7%)	58 (21.0%)	10 (6.8%)	43 (15.0%)	56 (19.0%)	32 (12.2%)	62 (22.5%)
鍵盤楽器の経験があるもの	13人 (4.8%)	11 (4.2%)	24 (7.9%)	17 (6.7%)	32 (12.0%)	16 (10.8%)	34 (11.8%)	29 (9.8%)	37 (14.1%)	38 (13.8%)

表(1)に示す通り，10年間の学生の音楽経験調査によると，除々に変って来ているが，その半数以下があまり音楽的知識・技能を持っていない事がよくわかる．

彼等の小学生時代からみれば，今日のように，あらゆる種類の情報が氾濫している情報化社会の中で，テレビ・ラジオ・レコード・テープ等のマスメディアを通して，全国どこに住んでいても同時的にその恩恵を受けることができ，そうした時，子ども達にとって音楽のあらゆるジャンルが洪水のように視聴覚的に強力な印象としてたえず入ってき，それが子どものパーソナリティ形成に深いかかわりをもっていることは否定できない．こうした現状をみた時，学校教育の中での音楽は，音楽の豊かさ，楽しさ，美しさを基盤とした積極的に成長してゆく力を，すぐれた模範教材を含めて，望ましい音楽的環境を用意して行く必要があると思う．そのためには音楽経験に乏しい彼等学生にできる限りの音楽的経験の場を与へ，実験・訓練を通して音楽的力をつけ，音楽に対して抵抗感を持たない指導者を養成してゆくのが教育大学の重要な使命であると考える．

全ての人間は生れながらにして基本的な音楽的能力をある程度までそなえていると考えられる．もし音楽性において違いがあるとすれば，発達段階における個人差の問題で，幼児期からの環境と音楽学習のプロセスに問題があると思う．家庭における環境も大切だが学校での音楽学習が重要な役割をはたす事は否定できない．学校教育の場で，もし子ども達が音楽嫌いになったとしたならば，それは大いに教師に責任があると云わなければならない．

2.「音楽教材」の指導内容

①「音楽教材」の履修方法と指導の目標

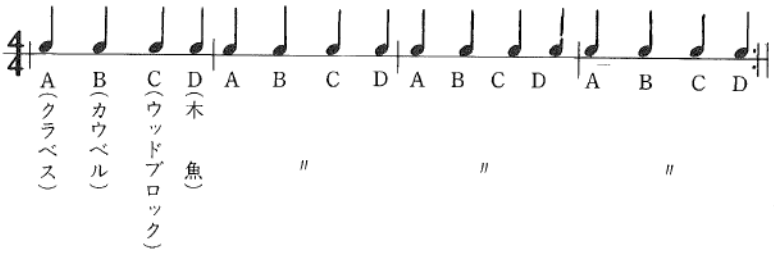
本分校においては,「小音」と「音楽教材」の2つの授業科目をそれぞれ2単位ずつ計4単位を三年次学生に前期「小音」後期「音楽教材」を1年間で履修させている.「音楽教材」に関しては,後期15週での時間配当は他大学での例をみても極めて,少ないことは否定できない.したがって15週の短い期間で,どう効果をあげてゆくかが問題で,授業の中味をどうしても精選してゆかなくてはならない.したがって広範囲にわたる小学校での音楽領域の中から「表現」だけに絞り,その中でも歌唱に関しては,附属教官の冬休み中の集中講義に委ね,私は器楽を扱い,現在小学校で使用されている楽器を中心に,楽しい音楽の学習展開が可能になるよう,アンサンブルを主体とした講義・指導を行っている.

②打楽器を使った指導

打楽器を使って正常なリズム感を身につけさせるためには,拍子や音符などについての理論的な学習よりも,先ず身体を使いながら興味深く反復練習をさせることである,したがって,最初から複雑な細かいリズムを打たせることではなく,その楽器が入ることによって,音楽がいかに生きてくるかを考えさせながら反復学習することである.打楽器は打ち方,鳴し方によって音がどうにでも変り,その音楽にふさわしい音量や,リズムが出せるよう楽器の性能,及び特徴をよく理解させ,自分自身が演奏してよく納得することが指導者として大切になってくるのである.いかに心をこめて打つか,鳴らすかなのであって,旋律を聴いて感じたこと,考えたことを音や動きでどう表現して行くかがリズム教育の上でも大変重要になってくる.

実験①　まず拍をしっかり身につけることを目的として,一定のテンポを4人一組になってそれぞれの楽器を打たせ,何回も反復させる.

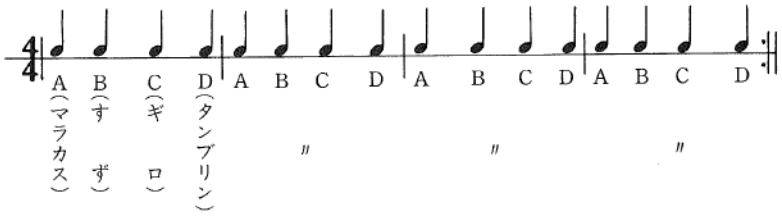
譜例(1)



譜例(1)のようにABCDの4人が一組になってそれぞれAは1拍目,Bは2拍目,Cは3拍目,Dは4拍目と自分の打つ場所がきめられている.この実験ではメトロノームで一定のテンポを与え,30秒から1分間続けて打たせてみる.うち一人でもリズム感・テンポ感の悪い者がいると流れが乱れ,最初スタートした時のテンポより速くなって行くのが普通である.テンポを遅くすればする程,拍と拍の「間」が持てなくなる者が多く,この実験で自分自身の拍に対する感覚の有る無しがよくわかるし,訓練することによってしっかりとしたテンポ感を取りもどす事も可能になってくる.

実験② 同じことを楽器を変えてやってみる．

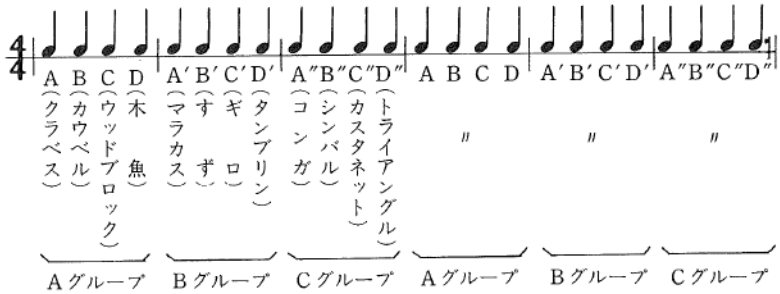
譜例(2)



譜例(2)の実験では，使用される楽器がある程度，手首を振動させなければ音が出ないので，この場合，自分の受け持つ1拍に対する音の存在意識をしっかり持って打たなくてはならない．一定のテンポの流れの中で自分の拍の責任を果すことが大切で，全体の拍に対するしっかりした意識と，自分が受け持っている楽器の音の持続を十分考慮に入れ，音色にも気を配って打つことが重要である．この段階になるとなかなか難しく，学生の個性も現れ，面白い実験である．しかしこれも訓練の反復によって正しいテンポの流れに乗れるようになってくる．

実験③ これは速度をいろいろと変化させて行うが，それぞれ異った楽器を持った4人グループを何組かつくっり，その組を順番に引き継いで演奏させてゆく．

譜例(3)



譜例(3)の実験は，それぞれの楽器の音色が異るので，全体の流れによく注意しながら自分の拍の役割をしっかりと果たして行くことが重要になってくる．自分にあたえられた楽器の性能を十分に生かしながら音を出す事が目的で，集中力に欠けると，自分の拍を落してしまう事がよくあるので，結構神経を使う実験である．

以上のようにいろいろな打楽器を使用しての基礎的訓練がある程度できてくれば，次の段階として，教科書の歌唱教材を用いて，その曲に合った打楽器を使い，効果的なリズムも共に考えながら打ち鳴すと非常に楽しくなってくる．リズム指導については，子ども達にとって始めからあまり難しいものではなく，いろいろな楽器を打ち鳴す遊びの一つとして学習の中で活用できれば，音楽の楽しさ，豊かさを失うことなく発展させて行くことができる．

音楽を聴いて，感じたこと，考えたことを，歌い，打ち，鳴して表現して行くことが，豊かな音楽性の発展につながってくるものと私は思うし，彼等学生が将来，現場で，子ども達への音楽の楽しい導き方として，これらの訓練体験が生きてくるものと信じるものである．

③リコーダーについての指導

この楽器も戦後の昭和32・3年頃から学校教育の中で使われるようになった楽器で，教育的意義は極めて高い．

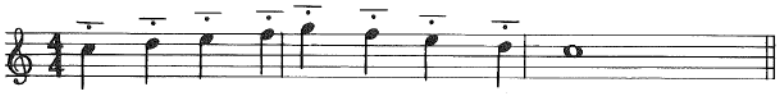
作音楽器であるがために，現場では，教師の指導と生徒の努力が相まって，より正しい音程，より美しい音色，更により深いアンサンブルへと音楽を深めて行く過程は極めて大である．

奏法が正しければ，短時間で修得することができ，進歩もはやい．またこの楽器は弦楽器と同じように，同族の楽器としてソプラノからバスまでの他に，ソプラニーノ，大バスと8種類もあり，音域の異りから，小アンサンブルから大合奏まで可能で，小学校低学年から中学校・高校，更に一般と幅広く楽しむことができる．

練習①　メロディーをより美しく歌わせるために，歌唱教材をいろいろ使って，アーティキュレーション（演奏法）の正しい理解と練習である．そのためには次の4通りの奏法をしっかりと身につけさせることである．

1.ノンレガート

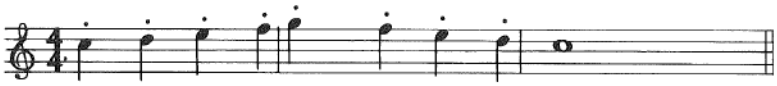
譜例(4)



音と音の間に僅かな切れ目が聞こえるような奏法で，1音1音に軽いタンギングをして息の流れを止め，明快な音を出させる奏法である．

2.スタッカート

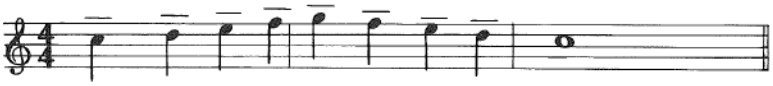
譜例(5)



tuまたは「トッ」と発音したらすぐ次の音の準備のために舌で息の流れを軽く止め，次々の音を同じように短く吹く奏法．

3.ポルタート

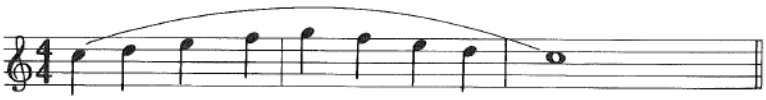
譜例(6)



テヌートの連続で音を十分に保ちながら息の流れを止めずにすばやくタンギングをしながら切れ目がないように音をつないで吹く奏法．

4.レガート

譜例(7)



はじめの音だけをタンギングし，息を吹き続けながら運指を変えるだけで吹く奏法．

以上のようにこの4つの奏法を，しっかりと理解し，区別して使いわけができなければ，より生

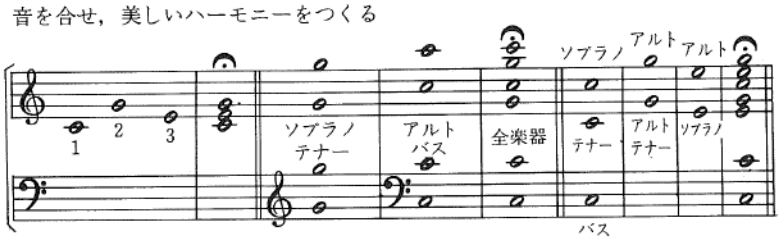
きた音楽の表現はできない．歌唱教材を使ってのいろいろなタンギングのつけ方と共に，アーティキュレーションの正しい研究は，音楽をいっそう豊かなものにする重要なものなのである．

練習② 美しいハーモニーを自分で体験しながらつくり出す訓練．

リコーダーは作音楽器であるから，息の量・スピードによって音程，・音色が微妙に変化するので，より響きのよいハーモニーをつくる訓練に大変役立つ．たとえば，普通鍵盤楽器で三和音を弾くと始めから調律が平均律できめられているので，その三和音に変化を持たせることは不可能である．リコーダーは音程が自由であるから純正調の美しい響きを３人でつくり出すことができる．たとえば，根音に対して第５音の完全５度は，根音をよく聴きながら響きがよくなるまで音程を上げ下げすることができ，第３音の音程調整によって，見事な三和音の響きを得ることができる．またお互いに３者の息の量を加減することによって，バランスのとれた美しいハーモニーを味わうことができるのである．美しい和音感覚を育てることは，合唱をはじめとして，アンサンブルを行うためには絶対に必要なことで，リコーダーはこうした訓練には大変貴重な楽器と云わなければならない．

音を合せ，美しいハーモニーをつくる

譜例(8)



ソプラノ笛で，３人で順番に吹いて，美しい三和音の響をたしかめる。

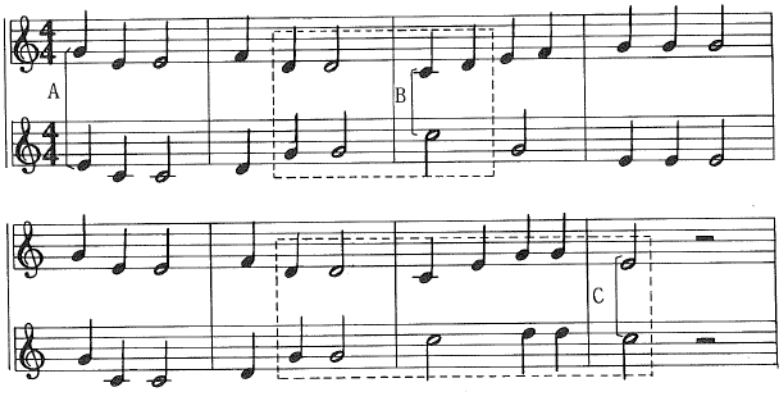
同じシステムの楽器同志でオクターブを合せ，最後に合楽器で吹き，美しい完全互度をつくる

全楽器を使って，C.G.Eの順番で音をかさね，アンサンブルでの和音づくりを練習する。

練習③ 相手と気持を合せてバランスのとれた重奏をする訓練，これは２人，３人４人と重奏してゆく場合，お互いの音程を揃える事は勿論大切であるが，音色にも十分注意しなくてはならない．縦の和音の響きと同時に音符の長さ，アーティキュレーションの統一と，相手の施律をよく聴き，自分が受け持つ旋律の存在をよく理解しながら表現してゆく事が重要になってくる．

〔ちょうちょう〕 ギースベルト編曲

譜例(9)



譜例(9)のような場合，発想の記号がなにもついていないので，強弱・音符の長さ・アーティキュレーションをまずどう統一したらよいか検討しなくてはならない．譜面Aのように，3度音程が多いので，難しい3度の響きに注意させる．譜面のBでは，1オクターブの音程であるが，主旋律が$\dot{C}$なので，副旋律の$\dot{C}$が強くならないよう十分注意させなければならない．譜面Cについても6度音程バランスをよく考えて吹くこと．点線の所は主旋律の下降に対して副旋律が上降しているので，特に音量に十分注意して，主旋律と副旋律のバランスをよくし，たがいに共鳴するよう吹くことが重要である．

④鍵盤ハーモニカを使った指導

わが国の小学校では器楽教育の中で，戦後の初期まで使用されて来たハーモニカに変わって，現在では鍵盤ハーモニカが全国的に使用されている．

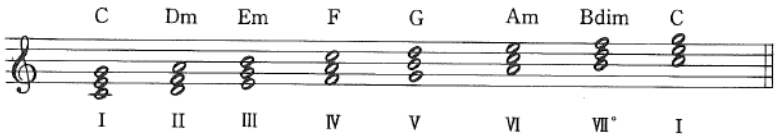
この楽器が器楽教育の中で果たす役割は計り知れない．この楽器は鍵盤楽器であると同時に吹奏楽器でもあるので，息の使い方，舌の使い方によって鍵盤楽器では出せない，ビブラートとか，音色，リズムの変化を自由自在に表現することができるし，最も有効な活用として，聴音の学習に利用でき，ふしリレーや，ふし問答の楽しい遊びの中で学習ができることである．簡単な和音伴奏がひとりでできること，楽譜と音の結びつきを確かなものにするため，音の間違いや，わからない時の確かめができること，自分で楽譜を読みながら演奏する力をつけることなどがあげられる．

私が学生に使用させる場合，これら現場での有効な利用を頭におきながら，学生には，この楽器を使用して，コードネームを教え，即興的和音伴奏の訓練，また，即興的オブリガートの試行を経験させることによって，器楽曲をアレンジする勇気を持たせることにある．

現代の学生は，音楽経験があまりない者でも，コードネームは案外容易に理解できるようである．これはギターが大変普及したため，家庭でコードをさぐりながら弾いた経験があるためだと思われる．

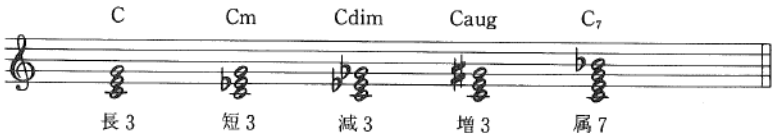
指導の順序として，まずコードネームを鍵盤の上で十分に理解させることから始める．

譜例(10)



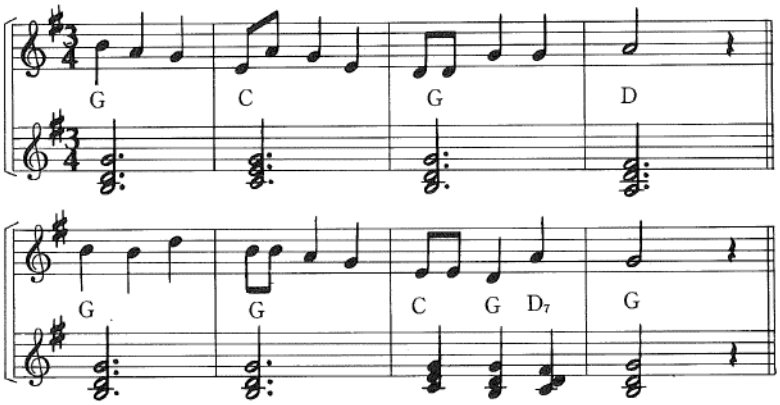
次に，長三和音，短三和音，減三和音，増三和音，属七和音等の理解も十分にさせることである．

譜例(11)

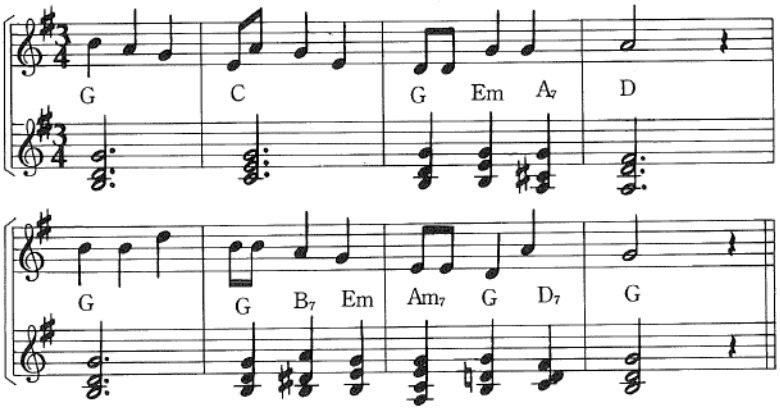


この他，長6度音の附加和音や，長7度音の附加和音及び，掛留和音等もあるが，あまり全部にわたると混乱してくるので，実際の使用にあたっては，主要三和音を中心にし，味わいのあるハーモニーを響かせるために必要な副三和音はできる範囲で使用させている．

譜例(12)



譜例(13)



譜例(12)(13)は歌唱教材から「うみ」を題材にしてコードづけをした例だが，譜例(12)ではほとんどの学生が主要三和音を使ってコードをつけることができる．

コードにだんだんなれてくると，譜例(13)のように少し味わいのあるコードもつけられるようになる．

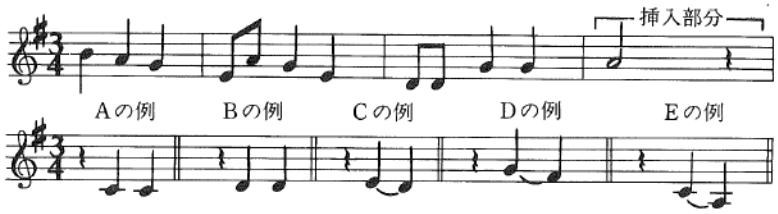
次の段階としてこの楽器を使用して，主旋律と協奏する副次的な旋律（オブリガート）を即興的に試させることを行なう．

この場合，順序として始めから主旋律の頭から同時にオブリガードをつけて行くことは非常に難しく，やはり段階を経ることが望ましい．

試行①として，主旋律をよく聴いて，それに対応する短いリズム的な合いの手（挿入句）を試させる．

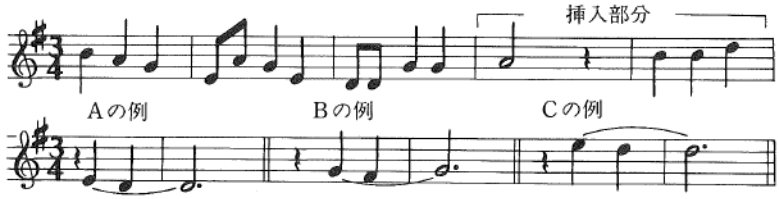
歌唱教材「うみ」を例としてみると譜例(14)のように4小節目の半終止に次の旋律のつなぎとしていろいろ試させてみる．

譜例(14)



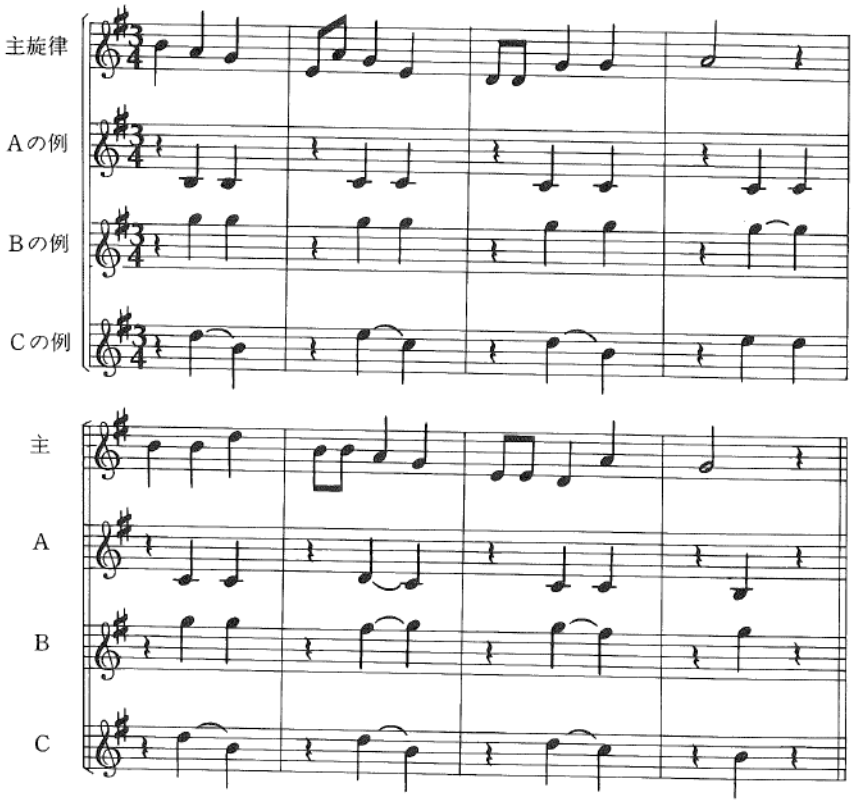
次に試行②として主旋律に対応する短い旋律的な合いの手を試させる．

譜例(15)

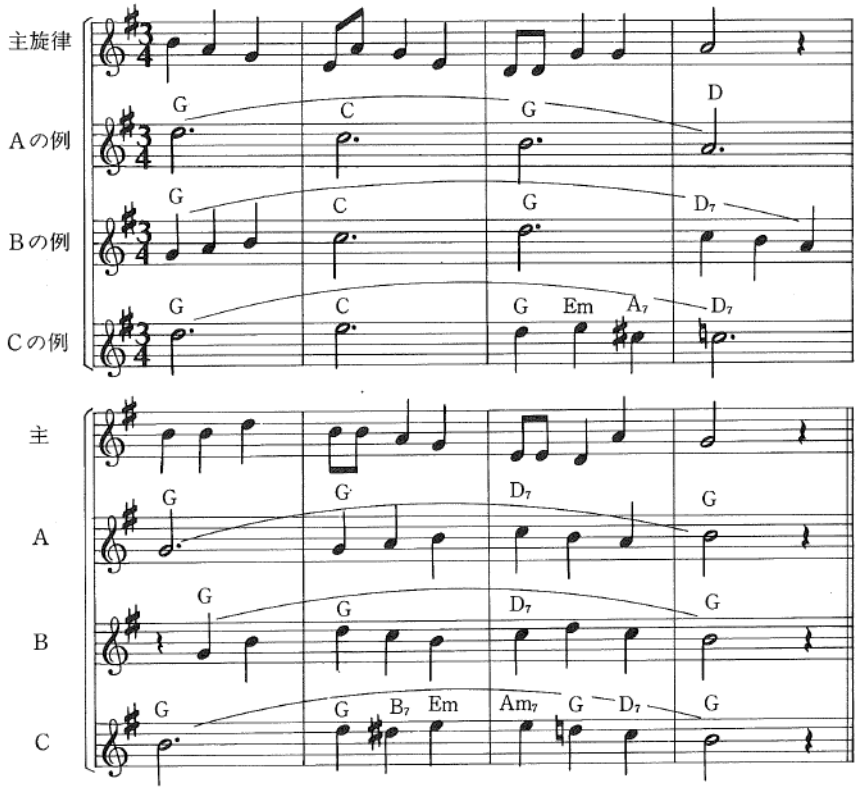


試行③として，主旋律に対してリズム的に対応しながら効果的に繰りかえして演奏される短い定形的なフレーズの試行である．

譜例(16)



以上これらの過程を踏まえていよいよ本格的なオブリガートの試行に入るわけだが，その場合，あまり細かい動きをできるだけさけ，主旋律の美しさを失うことなく，あくまでも主旋律を助ける助奏としての効果が出せるよう注意することが大切である．



譜例(17)

以上のようにこの鍵盤ハーモニカを使用しての素材はいくらでもあるが，五線紙の上だけでの理論的な編曲ではなく，実際に子ども達と一緒に音をさぐりながら即興的につくる，簡単なアレンジができ，楽しみながら音楽の肉づけができれば，この楽器の活用性は一段と高まってくるのである．

⑤歌唱教材を使用して器楽曲へのアレンジ

打楽器を使用してのリズム訓練と，楽器についての音色，奏法の知識と理解，リコーダーを使用しての旋律の美しい表現の仕方と，きれいな響きのハーモニーをつくる体験，鍵盤ハーモニカを使用してのコードネームの理解と，即興的オブリガードの試行等は，学生達にとって，まだまだ十分な音楽の理解と，力がついたとは云えないが，これらの楽器使用の体験によって，音楽の重要な三要素である，リズム・メロディー・ハーモニーを少しは理解し，音楽の楽しさを会得することができたのではなかろうか．

この体験を生かし，最終段階として，歌唱教材から曲を選び，器楽曲にアレンジする課題を与え，できあがった作品を，交代で，何人かで演奏し，それぞれの長所，短所を指摘し合って，今後の参考とし，彼等が教育の現場に立った時，市販の器楽曲だけに頼らず，その学校の設備に合った，その子ども達の能力に応じたアレンジを自分で考え，子ども達と一緒に楽しい音楽学習ができること

を願うものである．

「音楽教材」の最終授業として，それぞれのグループ同志がアレンジした作品を全員の前で演奏をしてこの授業を終っている．

おわりに

音楽経験のないものに短期間で音楽の学習方法及び教育法を教えることは大変難しい．理論的なことを言葉でいくら伝えても音楽の力は決してつかない．やはり自分の目で見，耳で聴き，からだを使って打ち，鳴し，吹き，弾いた経験を通して，感じたこと，考えたことなどを自分なりに表現して行くことが，早く音楽に慣れ，理解することにつながってくるものと思う．

私の，この授業の指導方法には多くの問題点もあろうかとも思われますが，さらに研究を深めていきたいと考えている．

（本学助教授　函館分校）